

令和5年度柴田町議会3月会議

常任委員会行政視察研修報告書

産業建設常任委員会

常任委員会等行政視察研修報告書

目 次

1. 産業建設常任委員会行政視察報告書.....	3
--------------------------	---

令和6年3月1日

柴田町議会
議長 高橋 たい子 殿

産業建設常任委員会
委員長 秋本 好則

委員会行政視察報告書

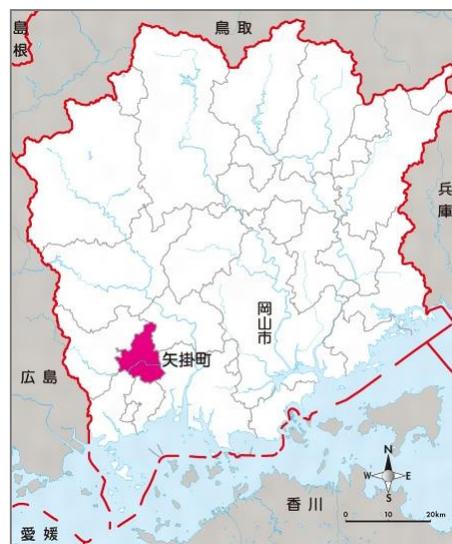
先に実施した産業建設常任委員会行政視察の結果を、下記のとおり報告します。

記

- 1 期 間 令和6年1月17日（水）～1月19日（金）
- 2 視察地及び視察内容
 - (1) 岡山県矢掛町
 - ・世界初のアルベルゴ・ディフーズタウン矢掛町の観光まちづくりについて
 - (2) 岡山県津山市
 - ・旧苅田家付属町家群リノベーション事業について
(コンセッション方式での公民連携手法)
 - (3) 広島県尾道市
 - ・倉庫を活用したサイクルフレンドリーな複合施設「ONOMICHI U2」について
- 3 参加者
(委員長) 秋本 好則 (副委員長) 安藤 義憲 ※1日目のみリモート参加。
(委員) 小田部 峰之、佐久間 光洋、吉田 和夫、平間 奈緒美
- 4 視察概要 別紙のとおり

1 町の概要

宿場町「矢掛」には、本陣・脇本陣が現存し、共に国の重要文化財に指定されており、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。また旧山陽道の商店街は、県の町並み保存地区にも指定されており、伝統的な町屋が建ち並んでいる。その町並みを利用したイベント「大名行列」が毎年11月の第2日曜日に開催されている。平成29年4月には、海を渡り、サンフランシスコで「大名行列」を披露した。また、平成26年3月には全国初のLED照明設備を備えた多目的グラウンド等を含む総合運動公園がオープンした。令和2年度には重伝建・道の駅・無電柱化のハード事業の3本柱が完了し、今後DMOを中心としたソフト展開が進められるところである。近年、商店街における新規出店もみられる。



人口：13,267人（令和5年11月20日現在）
世帯数：5,473世帯（ // ）
一般会計(当初予算)：令和5年度 89億5,000万円

2 研修内容

— 研修項目 —

世界初のアルベルゴ・ディフーズタウン矢掛町の観光まちづくりについて

取り組みの概要について

アルベルゴ・ディフーズタウンのサブタイトルを掲げる古い町並みを生かした観光まちづくりの軌跡を研修と現地での見聞でその原点を探ることを課題としての視察です。

そもそも矢掛町は人口が1万3,000人の比較的に小さい規模の自治体と言えますが、観光をモチーフとしてまちづくりを推進しています。

ポイントは、古民家再生と分散型ホテルが特徴といえます。近隣には倉敷市という有名な観光地がある中でどのような特色を出して観光客の誘致につなげるのか、一般的に言われる魅力とは違う一面を出さなければならない必要性があります。

地理的には旧山陽道の宿場町であり、参勤交代の折には本陣を中心として町全体に宿泊する習わしがあったようですが、その本陣と脇本陣が現存し、国指定の重要文化財となっていることと、同様の古い建物が散在し全体として歴史を感じさせる宿場町

の雰囲気は十分ありました。

しかし、文化財なら保存も管理の一つとしてできるかもしれませんが、商家や蔵元のような私人の建築物は劣化により存在そのものが危うくなる程に朽ちていくのを避けることはできません。矢掛町はこういった建物の寄付を受けて「街並み景観整備事業」を行い、72軒の建物の外観を整備し見た目のきれいさにつながりました。

これにより街道沿いの空き地空き家問題が解消され、観光地としての体裁も保たれる結果となりましたが、江戸時代から昭和に至る時代の建物が併存し、作り物ではない自然な時代の流れが見られるのも特色の一つであろうと言える。併せて電柱の地中化により、古い建物と電柱という違和感の解消に効果を発揮している。

この古民家再生事業が矢掛町の最大のテーマであると考えます。

事業の運営主体は、株式会社「やかげ宿」で、180人の株主で構成されています。

点在する古民家は整備され、交流館として情報の提供を初めとして、飲物や軽食のお店、会議のための部屋としての貸し出し、コンサートや講演会などのイベントとさまざまな目的の施設が再生・創出された。それに宿泊施設や温浴施設も加わり、点在する各施設が地域一体として機能を発揮する分散型ホテルの観光施設群が構成された。

また、もう一つの特色といえるDMOの設置がある。一般財団法人として「矢掛町観光交流推進機構」（通称：やかげDMO）が設立され、①観光資源の活用、②地域の稼ぐ力の推進、③観光地経営のかじ取り役としての役割を果たすという目的での活動である。

行政主導でのスタートではあるが、一般財団法人として行政の限界を超える“柔軟かつ迅速”なソフト事業の展開を実施する司令塔となった。

民間の主体的な取り組みを支援・推進し、情報発信を強化、広域連携の実施、観光客アンケートや観光看板の設置、観光アプリの運用など行い、行政と民間が協働できるパイプ役となる。

具体的な活動としては、アンケート調査による来町目的やニーズの分析、観光客の移動の分析、産業分析や経済波及効果の把握などを行い、誘客促進につなげる町のプロモーションやイベントの企画実施、旅行会社への補助金などが挙げられる。



▲無電柱化されていない区域



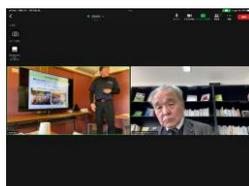
▲無電柱化された区域

3 所感と考察

- 観光協会を止めることにした理由は聞き洩らしたが、「株式会社やかげ」を町民一体で作し、観光面の実行を担わせている。「やかげDMO」は観光戦略を担うという連携が機能していた。町中の賑わいづくりが目標であり、その手段としての「観光」という位置づけが行政、株式会社やかげ宿、DMOで共有されていた。この3者の連携がどのようにできたのか興味を持った。建設部門での「電線の土中化」、教育部門で「重要伝統的建造物群」指定。これらが有機的に「まちづくり」の実を上げている。アルベルト・ディフーズのまちづくりを研修に行ったつもりであったが、賑わいづくりが結果的にアルベルト・ディフーズになったことが分かった。柴田町と比較して、効率の良い施策が行われていた。観光が「産業」として認識されていると思う。柴田町の場合多額の資金が「観光」に投資されているが、産業として成り立っていない。産業と認識されていない。投資先の選定が間違っていると考えられる。何が柴田町の「観光資源」なのか、そこから始めないとならない。最初からすべてが揃っていることはないので、まずスタートすることが大事と考える。株式会社やかげ宿は資本金1,000万円で1,800万円を町民から集めているので、民間主導と思う。毎週日曜日にイベントを仕掛けているようで、多様なイベントと考えられる。町中への賑わい回帰は民間主導で動かないと無理と考えた。これまで各地のまちづくりの現地を見て来たが、成功している地域や賑わいが生まれているところではそれなりのキーマンの存在があった。柴田町でも「人」に投資する方向に変えていく時期かと考えた。株式会社やかげ宿は指定管理やイベントで経営を行い、DMOは委託事業で経営をしている。芋を使ったスイーツを最初の自主事業としてスタートしているが、富谷での仕掛けを連想した。また、「やかけまるごと探索マップ」では手書きの絵や絵図の使用は参考にと考えた。新たな事業を起こすとき、コンサル頼りになり勝ちだが、津山では自作で始めた。事業効果を考えた場合、時間がかかっても自作を目指す方が良い結果をもたらすと考える。
- コンパクトにまとまり、やはり電柱が無いのでスッキリとした景観が形成されている。関係する方々の熱量が感じられる。魅力を最大限に活かし、観光事業を国内外において戦略的に推進、そして、地域に伝わる産業・暮らし・文化・景観・コミュニティを将来の世代に継ぐことを目的としている。この基本理念がしっかりとされている。観光をひとつの産業と捉えていることからこれからも成長し続けるのではないかと感じさせられる。現在残っている建物を活用した結果、分散型宿泊となっている。定期的なメディアへのアプローチ、旅行会社向けの補助金など積極的な工夫のあとが見られる。地元の学校との取組もある。道の駅は玄関口と捉え、あえて道の駅で物販・飲食の提供はしない、商店街全体が丸ごと道の駅の考え方、などなど全てがお手本になる取組。新たな取組も始まっているようである。
- 地域の一体化、行政と民間の連携による一体化が最大の特徴といえる。結果、観光客の増加、新規出店数の増加とともに順調に進んでいるようである。さらには、令和2年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されて、観光地としてのお墨付きが

増えた。これで課題は全て解決されたかという、なかなかそううまくはいかず、後継者問題は根深く有るようである。現在取り組み中とのようであるが、なかなか容易ではないだろう。現状の把握とともに、新しいことへの挑戦が続くことだろうと思う。資料には載っていなかったが、質疑応答の中で見えてきたことは人の動きである。町民との接触は無かったが、議員、役場の担当者、各施設の担当者それぞれが同じ方向を向いているように思えたことが羨ましいと感じた。それを踏まえて柴田町にどう展開するか、これからの課題となる視察だった。

- 観光協会をなくしたこと。町長が代わったことで見直すことができた。町民が楽しめる施設にしたいと尽力。アルベルゴディフーズ(分散型宿・現代版の宿場町)をはじめから目指したわけではなく、振り返ればそれらしくなったとの事であった。510メートルを3年間で無電柱化した。景観にも災害にも役に立つと4億円かかったが、町の持ち出しは700万で済んだ。参加した担当の人たちが喜んで、次はキャンプ地を作ると意気込んでいた。道の駅にも案内されたが、物販のない案内だけの道の駅で、町中に誘導していた。指定管理だけでは成功しない。発想の転換がなければできないと言い切っていた。
- 矢掛町における取組は、先人が残してくれたものを活用したまちづくりでした。400年間町並みは変わっていない、先人が残したものをしっかりと守っているところに感銘を受けた。古民家再生も宿場町に重きをおいたキーパーソンがいたこと。平成26年に観光協会が閉鎖し、約5年間は観光協会がなかったと聞きました。そこから観光振興をしよう、やかげDMOが誕生している。人事には町職員が2名。矢掛商店街の無電柱化(令和3年3月完成)防災対策と景観整備を目的に電線を地下に埋設し、無電柱化工事を実施している。事業費は4億円のうち町の持ち出しは700万円で残りはNTT、電線管理者6社という。工事に関しても地元の協力があった。電柱がないことで景観が非常にいいものになっていた。最後に、「良いものでおもてなし」をしていくには地域の人々の協力や飲食店の協力が不可欠になります。これからの事業展開をしっかりと注視していく。



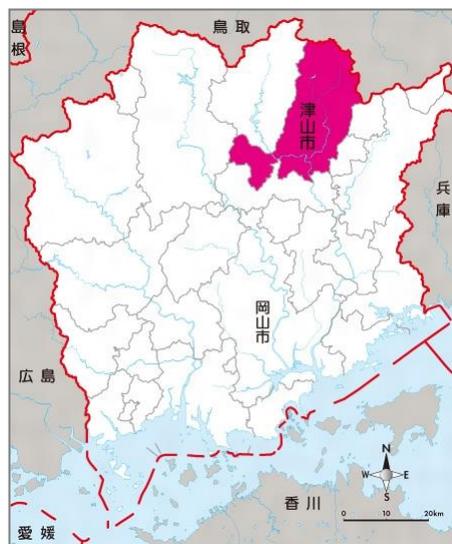
〈 Ⅱ. 岡山県津山市 〉

令和6年1月18日視察

1 市の概要

津山市は、岡山県北東部に位置し、北は中国山地、南は中部吉備高原に接しています。人口は約10万7千人で、江戸時代の津山藩城下町から発達した都市です。市内には、「旧津山藩別邸庭園（衆楽園）」をはじめ、城東町並保存地区、田町武家屋敷跡などがあり、豊かな歴史遺産とともに城下町の町並みが並びます。

津山市は温暖な気候風土、山陽、山陰を結ぶ交通の要衝として地理的利便性により、古くから岡山県北部の中心地として栄え、今も西日本でも有数の桜の名所として有名な鶴山公園（津山城跡）を中心に城下町の風情を残した豊かな自然と都市機能が調和した田園都市です。



人口： 96,314人（令和6年1月1日現在）

世帯数： 45,669世帯（ // ）

一般会計(当初予算)：令和5年度 481億5,000万円

2 研修内容

— 研修項目 —

旧苅田家付属町家群リノベーション事業について
（コンセッション方式での公民連携手法）

（1）旧苅田家付属町家群について

旧苅田家付属町家群は、岡山県津山市の城東地区に位置する伝統的建造物です。この町家群は約250年前の江戸時代後期に建てられ、平成25年に市へ寄付され、現在は観光の拠点となっています。

町家群は、それまで住宅などとして使用されていましたが、市が修理を行い、令和2年7月に一棟貸しの宿泊施設「城下小宿 糶や」にリニューアルされました。伝統的建造物としての外観を復原し、隣接する国指定重要文化財「旧苅田家住宅」から約60m続く軒庇（のきびさし）は、城東地区の町並みを象徴する建築様式であり、大きな見どころとなっています。

また、耐震補強工事や基礎の設置、屋根葺替え、内装改修、設備工事を合わせて実



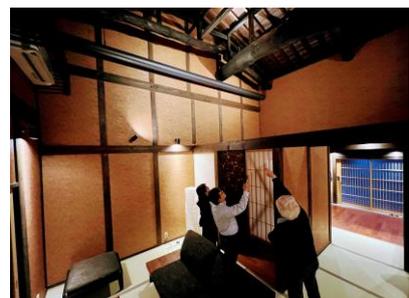
▲城東地区の町並み

施することで、建築物の安全性の向上を図っています。この施設は、コンセッション方式による運営権を市が設定し、民間事業者により運営されています。

なお、旧苅田家付属町家群は、重要伝統的建造物群保存地区内にある江戸時代後期に建てられた町家で、伝統的建造物としての外観を復原することで当時の空気感と歴史を感じられる癒しのスペースとなっています。施設は、1日限定3組の一棟貸しの町家ホテルとして宿泊棟3棟、ラウンジ棟1棟で構成されています。

【城下小宿糶やの概要】

- ・所在地：岡山県津山市林田町68 ・開業日：2020年7月17日
- ・構造：木造瓦葺 地上2階建 ・構成：宿泊棟3棟、ラウンジ棟1棟
- ・客室料金：大人1名あたり1万6900円～
- ・敷地面積：544.76㎡ ・延床面積：518.91㎡
- ・宿泊棟
 - 客室A棟
面積：220.70㎡（屋内 1F 110.02㎡+2F 66.36㎡+屋外 44.32㎡）
定員：8名
 - 客室B棟
面積：213.84㎡（屋内 1F 113.32㎡+2F 46.33㎡+屋外 54.19㎡）
定員：11名
 - 客室C棟
面積：134.71㎡（屋内 1F 81.25㎡+2F 26.07㎡+屋外 27.39㎡）
定員：6名



（2）コンセッション方式での公民連携手法

津山市では、公民連携（PPP）を活用して新しい制度を導入しています。この制度では、民間事業者から独創的なアイデアやノウハウを活かした事業提案を募集し、民間提案型の公共サービスを実施しています。

津山市は、公共施設等の管理・運営を従来の行政主導から、市民ニーズを的確に捉えた上で、民間事業者が新たなビジネスモデルを構築し、収益性のある公共サービスを実践する方向へとシフトしています。

具体的な事例としては、「旧苅田家付属町家群を活用した施設の管理運営事業」が

3 所感と考察

- 矢掛町と共通することが多く、特に市・町職員の自在な対応に柴田町との差を感じた。柔軟な考え方があった。寄付を受けた建物の相談を旅館業の人に相談に行くことなど、提案を理解して実行することなど組織の柔軟性を感じた。柴田町と比すると矢掛町と同様に観光資源が豊富にあることが「観光」に弾みをつけている。公共施設の利用方法についての民間提案募集についても公共施設管理計画を基に残す、残さないの選択ではなく利用方法を考えることで施設の有効利用になると思う。柴田町とは違った公共施設管理計画と感じた。柴田町の公共施設でも先入観を持たずにサウンディングを掛けていくこと、まずスタートしてみることが大事と考える。市の話では原則、これまでの指定管理は行わないということであった。コンセッションが上手く機能したためであろうが、指定管理の安易な延長は難しくなると考える。指定管理とコンセッションではプラス・マイナスで2倍の経済効果があると考えられる。公共施設は住民サービスの拠点ではあるが、使い方次第でプラスの経済効果をおよぼす拠点にもなると考えた。
- ホテルの社長に聞き込み、津山を安く売るなど進言されている。ここから行政側の意識に変化が出たようだ。コンサルティングは入れないで行政で要求水準書をつくり、時間とコストを省いた。初期投資分だけ面倒見て後は民間で完結。商売人でない行政が携わると使い勝手が悪いものが出来てしまい、結果利用が減り税金のムダ使いにつながる。行政は法的な縛りの解決などの段取しており、理想的な役割分担。住民主導で重要伝統的建造物群保存地区選定(2020年)されていることから、町全体ある程度の合意が醸成されている。このような地道な下地が在って実現可能となったようだ。民間がのびのびと商売に利用している様子が清々しい。時間はかかるが、町全体の合意醸成が何よりも必要と感じた。日本的なものを感じたい触れたい外国人に利用してほしい施設。
- 重要伝統的建造物群保存地区として指定された町並みの保存を目的に、市が所有する古民家を改修し、1棟貸しのホテルとして営業。運営は民間に委託し、運営期間は20年間という方針で、旧苧田家付属町屋群 リノベーション事業（PFI法、コンセッション事業）が完成した。今回の事業での効果をまとめると、行政関与→民間自由度。運営期間5年→運営期間20年。これにより民間意欲が高まる。行政側の負担としては、指定管理料として支出300万円→運営権の対価として収入450万円となる。町内横断のチームが結成され事業スキームを見直すなど、“熱く進める”という職員の意気込みを感じ取れたのは大きな成果と言える。
- 担当者の声として5年で目途をつけ、10年以内に黒字化すると言っているがその確信はどこから来るのかと聞いてみた。宿泊の料金で悩んだ時、ホテルのオーナーを訪ね「宿泊料金を1万円にするのか、それよりもう少し下にセットしたほうがいいのか」と伺ったところ、そのオーナーは「私だったら3万円。5万円にしてもいいと思う」との返事で自信が付いたとのこと。ターゲットを富裕層や外国人に絞った。現在3割の利用率ですが、想定内で大丈夫とのことだった。ここでも矢掛町と

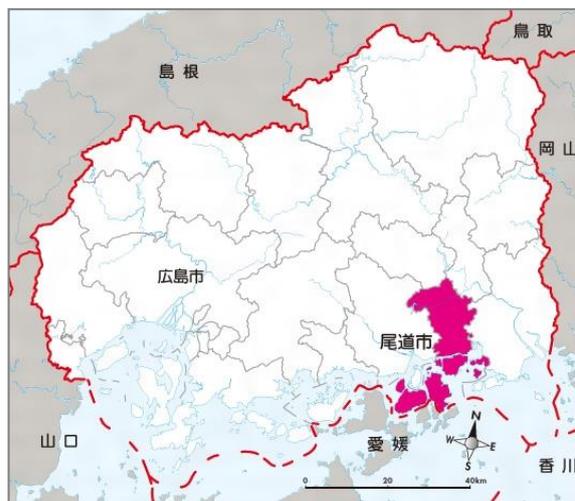
同様に市役所との連携はスムーズでさらに市内に推し進めたいと語っていた。

- 宿泊施設での料金設定を行政で考えると、ビジネスホテル価格（安い価格）になってしまう。そこで事業展開を考えていくにあたり、民間宿泊事業者に相談した。そこでの意見を要求水準書にまとめた。指定管理で行うと5年契約、できたものを渡す、行政が枠を決める、市が修繕で毎年300万円の支出だが、コンセッションにすることで、20年契約、運営者の意向に沿う、運営者の自由（価格設定）、運営者が修繕することで毎年450万円の収入が見込まれた。
- フォントデザインを市民からの募集で採用したことで市民の関心度UPにつながっていた。
- 津山まちじゅう博物館構想は屋根のない博物館。基本理念は「津山を未来に引き継ぐための「津山らしさ」の創造と地域活力の向上を掲げている。博物館構想は、まちを博物館にみたてるという視点でまちづくりをとらえるものであるが、新しいものをつくる、外から誘客施設をもってくるということより、「あるものを活かす」ということと、「中で人とお金を回す」ということに注力するための指針である。

1 市の概要

広島県の南東部に位置する尾道市は、向島との間を流れる尾道水道（海の川）に面し、古くから港町、商都、海上交通の要衝として栄えてきました。江戸時代には北前船（きたまえぶね）の寄港地として、今は国内屈指の造船業・造船関連業及び海運業の集積地となっています。

明治31年4月1日に県内で2番目に市制を施行し、平成30年に市制施行120年を迎えました。これまでに隣接町村との8回に及ぶ合併、そして平成17年には御調町及び向島町



と、平成18年には因島市及び瀬戸田町との合併を経て、それぞれの歴史・文化・地域の魅力がひとつになり、全国的に注目を集めるまちとなりました。多くの人を魅了してきた尾道の歴史と景観は、平成27年・平成28年・平成30年に、文化庁「日本遺産」として全国最多となる3件が認定されました。

瀬戸内のほぼ中央に位置し、山陽自動車道、しまなみ海道（西瀬戸自動車道）、やまなみ街道（中国横断自動車道尾道松江線）が交わる「瀬戸内の十字路」としての発展も大いに期待できるまちです。

伝統的なお祭りも多く、中でも「尾道みなと祭」、「おのみち住吉花火まつり」、「尾道ベッチャー祭り」は、尾道市民はもとより県内外からの多くの見物客で賑わいます。

人口：128,299人（令和5年12月31日現在）

世帯数：64,267世帯（ // ）

一般会計(当初予算)：令和5年度 592億3,000万円

2 研修内容

— 研修項目 —

倉庫を活用したサイクルフレンドリーな複合施設「ONOMICHI U2」について

(1) 背景

ONOMICHI U2は、昭和18年に尾道水道沿いに建てられた旧港湾施設「県営上屋2号倉庫」をリノベーションして造られた新しい複合施設で、全国初のサイクリスト向けの複合施設としてオープンしました。この場所は元々県営の倉庫として使われていましたが、地域の活性化と観光資源の創出を目指して再生プロジェクトが始まりました。



た。美しい島々と海を眼下に望むサイクリングロード「瀬戸内しまなみ海道」の本州側起点・尾道に位置し、広島県の倉庫活用事業として平成26年3月に尾道駅から海沿いを歩いてすぐの好立地に誕生しました。

(2) 施設概要

尾道市の港湾地域に位置しています。古い工場地帯の一角にあり、海との近さが特徴でしまなみサイクリングロードの起点となっていることから、サイクルフレンドリーな施設として運営されています。

ONOMICHI U2は、元倉庫を活用し残すものは残し変えられるものは変えるということで既存の建物をリノベーションした施設です。自転車を持ったままチェックインできるホテルをはじめ、スタイリッシュなレストランやカフェ・バー、瀬戸内アイテムを扱うショップまで勢揃いしています。

施設内の雰囲気は、古い倉庫の雰囲気を上手く生かしつつ、モダンでおしゃれな空間が演出されています。海をテーマにしたアートやデザインが施され、訪れる人々に独特の魅力を提供しています。

(3) しまなみサイクリングロードとの関わり

ONOMICHI U2は、しまなみ海道の一部として知られるしまなみ海道サイクリングロードと直接関係しています。しまなみ海道は、尾道市と広島県の島々を結ぶ自転車道であり、自転車旅行者にとって人気のルートです。

ONOMICHI U2では、しまなみ海道を利用する自転車旅行者向けの施設やサービスが提供されています。

自転車の駐輪スペースや修理サービス、自転車に関連したアクティビティなどが用意



されており、しまなみ海道を楽しむ旅行者にとって便利な拠点となっています。

(4) 地域の魅力向上

ONOMICHI U2は、元々の倉庫地域を再利用して生まれ変わった新しい観光スポットとして、地域経済の活性化や観光資源の多様化に貢献しています。

地域活性化という点では、ONOMICHI U2は元々の倉庫地域を再利用することで地域経済や観光資源の拡充に貢献しているといえます。また、観光資源の多様化という点では、尾道市の観光資源を海と自転車に焦点を当てることで、新たな観光地としての魅力を高めています。しまなみ海道との関わりを通じて、自転車旅行者や地域の人々との交流も深まり、地域全体の活性化に寄与しています。

地域の活性化と移住定住政策の推進に貢献する重要な拠点であり、地域の魅力を高め、新たな住民や訪問者を惹きつける役割を果たしています。

3 所感と考察

- サイクルツーリズムの観点から、ONOMICHI U2は行政との連携を期待していたが、実際は自主的な活動が目立った。例えば、ツーリスト向けのロッカー棟などの施設は、柴田町でも導入すべきと感じたが、柴田でのサイクルツーリズム案内が不十分だった。近隣の市町の案内ばかり目立つことが改善すべき課題であると考えた。また、レンタサイクルの提供やルートづくりも必要であり、対応が急務だと感じた。
- ONOMICHI U2の施設は、全体的に統一されたデザインであり、外観は倉庫そのものだが、内部は別世界であり、プロフェッショナルな仕事ぶりが感じられた。支配人の言葉通り、バランスの良い施設であり、このような企業が町全体のイメージを変化させることを実感した。また、瀬戸内の明るさと穏やかさが印象的であり、自分の自転車を宿泊施設に持ち込めるのは嬉しい点である。
- サイクリングロードとしての活用に合わせて、ONOMICHI U2はレンタサイクルや宿泊、関連商品の販売など、利用者のニーズに柔軟に対応している姿勢に驚きを覚えた。施設内の至る所でその特徴と対応が感じられ、利用者目線での配慮が行き届いていると感じた。
- 小樽や倉敷、横浜などと同様に、倉庫をリノベーションして観光に結びつけているONOMICHI U2。尾道では特に自転車に焦点を当て、倉庫内に宿泊施設を開業している。自転車掛けを備え、愛車と共に泊まれることは魅力的であり、自転車修理機器の設置など、徹底している点が好感を持てる。
- ONOMICHI U2は、現存する施設を有効活用し、人々の交流が活発に行われる場所としての役割を果たしている。施設の理念が徹底されており、働くスタッフの生き生きとした様子が印象的であった。地域の人々に愛される施設であり、観光客やサイクリストにとっても魅力的な場所であることが伝わってきた。今後、人口減少が進む中で、地域活性化に観光が重要な役割を果たすことは明らかであり、ONOMICHI U2の成功事例は今後の観光振興施策の参考になると感じた。

〈 IV. おわりに 〉

今回の研修で視察を行った3つの事例では、共通して公共施設のあり方や取扱い、やり方について柔軟な視点で、指定管理にこだわらずに考えていくことが必要だということが分かった。また、その前提としては、事前にサウンディング調査の手法等を取り入れるなど、自らが対話し調査することが必要不可欠であると感じた。

効率の良いまちづくりのためには、理念と目的を持ち、同じ方向性を目指すことが求められ、何を変えて何を変えないのかを明確にさせることが重要であると、改めて気づかされた。

今後、この研修の成果を産業建設常任委員会の活動テーマに基づく研究に生かし、一つの方向性として議会からの提言に結び付けたい。